

稲作だより

～第3号 田植え直前編～

健苗移植でスタートダッシュを！！

ハウス内の温度が高すぎる場合は、換気と遮光資材を活用して温度を下げましょう。

田植えはできるだけ天気の良い日に行い、保温的水管理で活着を促しましょう。

1. 育苗後半の温度管理 <<活着力を高めましょう>>

1.5葉期以降 温度のめやす	
昼間	夜間
15～20℃	5℃ 以上

田植え予定日の1週間前からは、降霜や極端な低温がない限り、夜間もハウスを開放し、徐々に外気に慣らします。

2. 育苗期間中の水管理 <<適切なかん水で徒長を回避！>>

○かん水は1日1回、朝にたっぷりと行いましょう。一見、乾いているように見えても、夕方に苗の葉先に水滴がついている場合は、かん水する必要はありません。

○朝にかん水した後、万一乾いてさらにかん水する場合には、昼ごろに行い、低温時や夕方には行わないようにしましょう。床土の温度が下がるとともに根が酸素不足になるなど、根張り不良の原因となります。

※育苗後半は、苗が水分を多く消費するため、乾きやすくなります。覆土や苗の様子をよく観察して、過乾燥に注意しましょう！

※日中はハウス内の水温がかなり高い場合があるため、注意してください。手で水温を確認してから、かん水しましょう。

3. 追肥は適期に適量を <<1箱あたり窒素1gが基本>>

◇追肥時期と100箱分の施用例

苗の種類	追肥時期	施用例
中苗(35日苗)	1回目：2.0葉 2回目：3.0葉	例) 液肥2号(窒素成分10%)を100箱に施用 水100リットル+液肥1リットルを混合し、1箱あたり1リットルずつ施用。
稚苗(25日苗)	1.8葉期	

※育苗土に緩効性肥料（中苗一発など）を使用した場合は追肥の必要はありません。

4. 田植えのポイント <<適期に適正な株数で植えよう>>

○ 収量・品質及び食味を安定させる移植適期は5月15日～25日頃です。移植時期が遅れると、初期茎数が確保できず収量に影響する例もあります。適期内の移植で

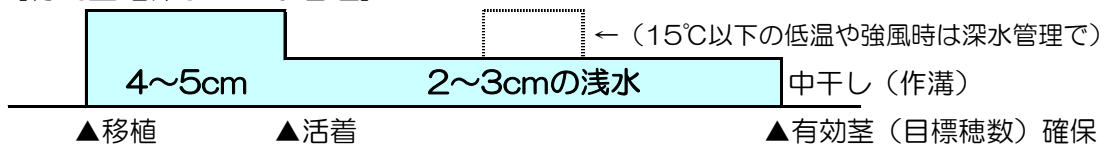
初期茎数を確保しましょう。

- **天気の良い日に移植**を行い、低温や強風による植え傷みを防止しましょう。植え傷みを抑え、速やかな活着を促すことが初期生育の確保に繋がります。
- **栽植密度は21株/㎡（70株/坪程度）**、株当たり植込本数4～5本が標準です。栽植密度が低いと今後の気象によっては、茎数・穂数の不足、1穂粒数過多による登熟不良、玄米タンパクの上昇等につながる場合があります。気象変動に対応するために適正な栽植密度で茎数確保に努めましょう。
- **適正な植え付け深は3cm**程度です。根が露出するような過度な浅植えでは、除草剤の薬害が発生しやすくなります。反対に深植えは初期の分げつを抑制し、根の発達も不十分になります。

5. 田植え後の水管理 <活着を促す水管理を行いましょう>

- **移植直後は水深4～5cm**として（風や外気から苗を保護するため）、活着を促します。
- **活着後は2～3cmの浅水**とし、分げつの発生を促します。
- 気温が15℃を下回る低温時や強風の時には、深水とします。

[有効茎確保までの水管理]



- 大切な用水ですので土地改良区等の情報を基に適期・適正に灌水しましょう。

6. 除草剤の適正使用 <使用基準、使用適期を守ろう>

- 効果を高めるとともに、河川への成分流出を防ぐため、散布後7日間は止め水し、田面を露出させないようにします。
- ※田植同時処理を行う場合には、使用時期に「移植時」の適用がある除草剤を使用します。「移植直後」の適用しかない除草剤は、田植同時処理には使用できないので注意してください。ラベルを確認して使用しましょう！

7. 葉いもち対策

- 葉いもちの発生を予防するため、箱施用剤を忘れずに施用しましょう。
- 取置苗は葉いもちの発生源となるため、速やかに撤去しましょう。

☆春の農作業事故防止啓発運動展開中（4月10日～6月10日）
例年、この時期の機械操作中の重大事故が起きています！
あせらず、ゆとりを持って農作業をしましょう。周囲の方にも、声掛けを！
地域ぐるみでSTOP！農作業事故！